



## 「忠臣蔵三百年」48番目の義士 萱野三平重實④

### 『開城』そして『帰郷』

元禄14（1701）年3月18日午後8時に、早駕籠で赤穂へ早水藤左衛門とともに刀傷事件の第一報を伝えた三平は、同日午後11時に到着した第二便の早駕籠により、主君浅野内匠頭長矩の切腹を知りました。（第二便の使者は、原惣右衛門と大石瀨左衛門）

その後、大石内蔵助に誓紙（この時、主君の仇討ちは決まっておらず、内蔵助に従うことを誓った）を差し出した三平は、城が明け渡されるまで赤穂にとどまっています。4月の終わりがらには故郷萱野に戻ってきました。14年ぶりに帰郷した三平は、隠居した父重利や姉妹たちに迎えられました。浪人になった自身の境遇を考えての遠慮があったのでしょうか、父と同じ本宅で暮らさず現在も残

されている長屋門の一室を居室にしたと伝えられています。

しばらくは3月に亡くなった母の喪に服していましたが、百ヶ日法要が終わった6月の後半に、美濃国川辺に在住する兄、大嶋三郎右衛門（旗本大嶋家の家老）もみじだより6月号の略系図を参照）を訪ねて1カ月余り滞在しました。その滞在理由は明らかではありませんが、父重利が、浪人になった三平を大嶋家へ推挙するために、美濃へ使わしたという説もあります。

三平は、美濃からの帰り道、山科に隠棲する大石内蔵助や京都にいた大高源五に会った後、萱野に戻りましたが、8月14日には、京都紫野の瑞光院で行われた主君内匠頭の追善法要に参列しました。多くの旧赤穂藩士（浪士）が集まり、復讐に向けての密談が行われました。

この時点では、江戸に滞在していた堀部安兵衛などの復讐を急ごうとする一部の急進派と、

内蔵助を中心とする大多数の自重派に分かれ、足並みが揃わずにいたため、内蔵助は急進派の説得を進めていました。三平も江戸の浪士などとともに急進派に属していましたので、9月になると、大高源五が三平を説得するため萱野を訪れました。

大高源五は、赤穂浪士としても著名ですが、俳人「子葉」の俳号でも広く知られています。赤穂藩では藩主内匠頭を始め、多くの藩士が俳人として名を残していますが、江戸で活躍していた俳人水間治徳の門下に入っ指導を受けた子葉、竹平（神崎與五郎）、涓泉（萱野三平）の技量は、特に多くの俳人仲間認められていました。

俳人子葉が、同門の涓泉とともに勝尾寺や箕面の滝を訪ね歩いたことは、元禄15年に刊行された子葉編「俳諧二つの竹」によつて知られています。その内容については、次号で紹介いたします。

涓泉即（萱野三平の家）を訪れた子葉の即興の句

壁を這ふ 木綿の虫の

もみぢ哉

子葉の句に応えた涓泉の句

秋風や 隠元豆の 杖のあと

